

時刻は深夜3時。とある大学の学生寮『富盟荘』では、誰が騒ぐでもなく多くの者は寝静まっていた。しかし勿論例外はある。その者のペンが走る音だけが静かに響く。数秒書いては数分止まる。迷いのある落ち着かない音だ。

その音の主、狩谷は翌々日にとある講義の試験を控えていた。落ち着きがないのも当然、それは彼の志望する研究室に入れるかどうか、それを決めるための大事な試験である。

「う、うーん……っ」

固まった体を軽く伸ばすと、情けない自分の声が台所に響く。部屋で勉強していると、どうしても気が散るのでこの場所を借りているのだが、それで勉強が捗るはずもなかった。

見辛いノートの要点を、汚い字でまとめていく。それはまるでドブから泥を拾うような作業で、その意味を問うような時間が刻々と過ぎていった。

進まぬ作業と呻き声以外の音を聞いたのは、それから30分も経った頃のことである。コツンコツンといった音に続けて、良く知った声に呼ばれる。

「おーい、狩谷ー。勉強してないんなら夜食でも作ってくれよー」

そうやって現れたのは、この時間に起きているもう一人の例外、一学年上の神沼だった。

神沼も同じく近々資格試験を控えており、この時間になるとコーヒーを淹れに来たところで顔を合わせる人が多い。不真面目ではあるが、話が面白く——そういう人物が往々にしてそうであるように、何故か勉強の出来る神沼と話し込むのは、終わりの見えぬ作業の休憩には丁度良かった。神沼は前の席に乱暴に腰を下ろす。

「お前と顔合わせるのは、いつもこの時間だな」

「……神沼さんは、普段勉強してるんだから、こんな時間まで根を詰めて勉強する必要ないんじゃないですか？」

狩谷のやや棘のある物言いに、神沼は怒るでもなく不思議そうに眉を顰める。

「いや、別に勉強してないけど。ゲームやってたら喉渴いちゃってさ」

「……そうすか」

狩谷は自分の要領の悪さを知っていた。だから神沼の答えを聞いても悔しくはない。効率良く生きられない人間は、その分夜な夜な台所でドブを漁るしかないのだ。

神沼はノートを覗き込むと、汚い物を見てしまったかのような顔をして、勝手に人のノートを閉じる。

「相変わらず狩谷の勉強法は肩ツツツ苦しくて、効率悪いな。おまけに字も汚い」

「分かってるんで、黙っていてくださいよ。あるいは教えてくださいよ」

「嫌だ。出来る奴は深夜に勉強なんてしないんだ。深夜に遊ばないのは出来ない奴のすることだ」

狩谷は唸る。いつその他の寮生に聞かれてしまえば良いのに。

「だけど、代わりに面白い話を聞かせてやろうか。丁度今のお前みたいな奴らの話だ。興味あるか？」

期待していなかったと言えは嘘になる。もつともどう話題を振っても、話し好きの神沼は同じことを言うだろう。一応言ってみる。

「全然興味ないです。聞きたくもありません」

「遠慮するなよ。昔聞いたとある中学校の話なんだけどな——」

2

ヒンキーパンクと言う妖精がいる。主にイギリスの伝承に残っているそれは、一本足でランプを持ち、夜道で迷い人を導いては沼や池に誘い落とすと言う。日本の鬼火に近い種族で、人を惑わし時には死に追いやる危険な妖精だ。

伝承から数世紀、それが再び姿を現したのは一九九八年の四月——一見なんの変哲もない日本の中学校であった。それも極々普通の女子生徒としてである。目的は勿論彼——いや、彼女の本分を果たすためだ。

その前に学校の話しよう。先ほども述べたように、それは一見普通の私立中学校である。一九七五年に開校し、現在生徒数は一二〇〇人。生徒数は男女比が6対4と言ったところ。部活動は吹奏楽部が盛んで——いや、そんな話は説明する必要はないだろう。内部の、あるいは周囲の人に特

色を聞けば皆一様に同じ答えを言うはずだ。

『徹底的な監視と、誰一人身動きの取れない校則』

指定の物以外の持ち込み禁止。

一日2回の持ち物検査。

私立校随一の監視カメラの数。

登下校は教師のいるルートを通ることの義務付け。

保護者協力の徹底したプライベートの管理。

その創設者にして「勉強より秩序を尊びし学び舎」と言わしめただけあり、自由のない劣悪な環境で成績が落ちたとしても、従順な人間を作ることだけを目的とした——少なくとも生徒たちの親はそれを望んだ、謂わばそれは牢無き監獄であった。

入学から数週間もすれば、生徒たちはその異常性に気付き初めは抵抗する。私物の持ち込み。ゲームセンター、映画館、本屋、飲食店。しかし、その度に矯正されその次の事実気付くのだ。

ここでは、従わぬ者は人間としてすら見られない、と。

日常から道を強制することで、次第に生徒は逃げ道を探す術を失っていく。退学と言う逃げ道も、命を絶つことさえ選べない。そこは私立校随一の離学率の低さを誇るが、それでも生徒が減らない訳ではなかった。耐えられなかった者は『病気による長期停学』の名のもとに、提携している病院へと、その収監先を移すだけの話で、早い者は秋を迎えることなく、学び舎を去って行く。

7月の上旬。その女生徒もまた限界を迎えようとしていた。

「……ん、あれ……？」

何の楽しさも見いだせぬ現在に。

何の希望も抱けぬこれからの3年間に。

それは小さな箱に押し込められることに似ていた。錯覚とすら思えるような繰り返される毎日。

ただただ窮屈で、暗い、終わりが見えない。昨日と同じ眺め、同じ道筋、同じ顔、顔——

「……う……あつ……いき……が……」

ヒューヒューと息が漏れる。今は登校中？ 授業中？ 何をしているのかが分からない。いや、それ以前に息の仕方、体の動かし方も

「……ツ……ツ！」

彼女はそのまま椅子から倒れ落ちようとする。

(……何も見えない)

しかしその時、後ろから微かに——だがこの暗闇で妙に鮮明な声が聴こえた。

「全く本ツ当につまらない授業……。ねえ放課後にちよつと遊びに行かない？」

ガクンつと、一瞬世界が反転したかのように感じ、その後視界が開けてきた。気が付けば机に

俯せになっており、教師から罵声が浴びせられる。

「おい！授業中に寝てるんじゃない！」

「す、すみません……」

教室からは特に反応はない。他のクラスメイトもそんな余裕はないからだ。そして後ろから声を掛けてきた……気がする女子も今はその中に紛れて、黙々とノートに顔を向けている。足を怪我しているのか、それか元々悪いのか、その机の横には松葉杖が立てかけられていた。

放課後、約束通りに例の彼女と落ち合う。どうやらあれは幻聴ではなかったようだ。彼女はこちらの安堵を余所に楽しそうに話します。

——いつも行くゲーセンに新しいゲームが入ったんだけどーそれが二人でやったほうが楽しそうでーアイスの一個でも奢るから、ちよつと遊んでかない？

それを聞いて余計怪しく思えた。馴れ馴れしさにではない。そんなこと出来るはずがないのだ。ゲームセンターなんて常に教師か保護者の誰かが見張っている。それに通学路から逸れることも難しい。それが出来ないから皆苦しんでいるのだ。

そう訴えるとニつと笑って大丈夫大丈夫と手を振った。

「深刻に考え過ぎだって。こんなのただの気晴らしなんだから」

そうして半ば無理やりに手を引っ張られるようにして、彼女に連れて行かれる。すると、どうだろう。

確かに誰にも注意されることなく、すんなりと目的地に到着し、結局その日は暗くなるまで遊ん

できてしまった。帰り道も巡回の教師がいるはずなのに、会わないのか、気付かれないのか拍子抜けするほど簡単に家に着いてしまったのだ。

「……た、ただいまあ」

恐る恐る家に入ったが、不思議なことにこちらでも家族は何も言っていない。明らかに下校時刻から数時間たっているというのに。

「ああ、お帰りなさい」

怒る気配のない母を見て湧き上がった感情は安心でなく、昨日までに抱いていたのはまた別種の不安だった。

——今日、私は一体何と遊んでいたのだろうか？

次の日から彼女は下校時刻になると、決まって何処かへ消えていくようになった。しかしそれに気付く者はいない。

3

10月。一年も半分を過ぎた頃。入れ代わり立ち代わり、連日数十人の生徒が、下校途中、時には休み時間に、どこかへ消えていくようになった。

しかし教師たちは誰もそれに気付かない。むしろ今年度の一年生は、例年に比べて脱落者も少なく、成績の伸びも良いということで、自らの教育方針の正しさを周りに伝えることに今日も必死で

ある。

監視カメラには当然のように、休み時間に外へと遊びに行く生徒が映ることも多々あったが、それを見て不審に思う人間はいない。ただ平常と判断してぼんやりと眺めるだけである。

時には何の届けもなく欠席する生徒もいた。しかし、何故かその生徒の出席簿を付けるときには“欠席理由を探る”と言う行為に考えが及ばない。単純な病欠などの時には、むしろ仮病を疑うように家庭に電話をかけ、保護者へと確認を取る教師でさえも、ただ機械的に印を付けていくであつた。

今日も空席には目もくれず一日が始まる。

「欠席が9人か……よしっ朝のHRを始めろぞ」

その教室の空席が示す虫食いのように、片足の妖精は生徒たちを墮落へと引き込んで行つた。

松葉杖の女生徒——ヒンキーパンクはそのようにして、己の本能のままに学校を陥れようと行動した。実際彼女の能力を使えば、それは他愛もないことだろう。

しかし、3学期も始まった頃。ヒンキーパンクは己の存在が淡くなっている事に気付く。力は今までのように使える。一見して変わった様子もない。しかし自分では分かった——存在が希薄になつている。これは消える前兆なのだ、と。

慌てて原因を考える。彼女は思うがままにやってきただけで、入学してから何かを考えたのはそれが初めてだった。

やがて、その原因に心当たりがあることに気付き教室を見渡す。そして確信した。

彼女の教室にあつたのは、本来その学校にはなかつたはずの普通の生徒の姿であつた。休み時間

を楽しみにし、放課後のことを考え、退屈な授業に耐える極めて普通の中学生たちだ。

生徒たちは生きる楽しさを覚え、息抜きした分成績も伸び、皆で遊んだだけ友達も増えた。改善された教室の姿だ。

それを目にして彼女は衝撃を受け——絶望した。

ヒンキトパンクは人を不幸に陥れる妖精なのだ。

かつて妖精の姿の時と同じことをしていても、結果が違ってしまえば妖精の本分は失われ、やがて消滅してしまう。彼女は悩んだ。しかしそれは、もうどうしようもないところまで来てしまっていた。

「最近あの子見かけなくない？」

「だよね。面白い人だったのにねー」

いつの間にかいなくなった、一人の少女のことを皆が口にする。

だが、それを探そうと考える者は勿論、不審に思う者もいなかった。

やがて彼女の存在は忘れられる。以前のよう“教師に何故か見付からない”等の不思議な事は起きなくなった。しかし彼ら彼女らは既に息抜きのコツのようなものを知っていた。遊びなんて何時だって何処だって、大人たちの目を盗んでやることなのだ。逃げ方を知った者達は、かつてのように本当に追い詰められることはないだろう。

だけど、時々それを夢に思い出す人もいた。

闇の中、それは片足で立ちランプを持って、絶望していた頃の自分の隣にいるのだ。その暗闇を恐れない楽しげな、そして懐かしい振る舞いに涙を流すが、朝起きると何も思い出せない。どれだけ嘆いても、そこは悪魔も妖精も現れぬ日常であつた。

4

「——と言う可哀想な妖精の話でした」

神沼が話し終わつたときには、既に夜は明け、富盟荘の中にも朝日が差し込んでいた。

「どうだった？」

「いや、何というかそれがどうして今の僕みたいなんですか？」

「だって、死にそうになりながら勉強してるからさ」

「試験2日前なら普通でしょ、このくらい……」

そんな存在するかも疑わしいレベルの学校と比べられては困る。そこまで酷い顔で勉強していただろうか？そこだけは今度から気を付けよう。また神沼にからかわれては、本当にいつまで経つても勉強する気にならないだろう。

「まあ、話の内容なんてあんまり気にすんな」

「感想求めたの神沼さんですけどね」

「はははっ、細かいことは良いんだよ、こんなの単なる——」

ニつと悪戯な笑みを浮かべる。

「——気晴らしだ」

結局コーヒー冷めちやつたな。そう言つて杖を持ち部屋へと戻つて行く神沼を、狩谷はぼんやりと見送つた。

あとがき

テーマとの絡め方としては「素行が悪い」。

昔某ゲームで『混沌とは自由であり、秩序とは束縛だ』みたいな説明を見て「なるほどな」と思った覚えがあります。まあ、それを言ったらこの話は『悪』じゃなくなってしまうんですが。

おまけ程度の繋がり。今回は前々回の『もいちど夢で逢いましょう』の時と同じ舞台での話です。サキュバスにヒンキーパンクと、何故か西洋の魔物に好かれる学生寮。

5000字ギリギリと、長い話になってしまいましたが、最後まで読んで下さってありがとうございます。ございました。ルフでした。